

琉球大学学術リポジトリ

竹の栽培 (1)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大山, 保表, Oyama, Hohyo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19575

うである。因に同島では本病のことを「サバー」と称している。油蘆においては全土に発生するが、なかならず無肥料栽培の畑に多い。年中見られるが盛期は夏である。六月の適期植を俾すことを忘れてならない。

三、どうして本病を防ぐか

イ、本病の芋蔓から絶対に苗を採つてはならない。本病の伝播は主として被病蔓から飛散る胞子によるのであるから、病苗を植付けることは恰も病気の種子をまきちらすのと同じである。健全畑より採苗することによつて著しく発生を低下せしめることができる。

ロ、被病蔓に出来た芋を種蒔に使つてはならぬ。六島で研究したところによると、かゝる種いもから出る蔓は必ず糸病すると云ふ。つまり藪を通しても伝播すると云ふ。

ハ、苗の消毒に六斗式ホルド液を使い、これに三〇分間ほどつけて水洗後植付ける。

ニ、抵抗性品種の問題、即ち本病にかゝり難い若くは全然かゝらない品種があるかどうかと云う点については研究が十分でない。経路若の声をきいて貰いたい。本学でも研究する計画である。

(島袋俊一)

竹の栽培 (一)

経済局の調べによると、一九五四年における琉球の竹材輸入金額は四二五万余円となつており、今迄の琉球における竹材の使用数量はバナナ、パイナップル等の果実や蔬菜類の出荷需用、砂糖糖用等と漸増が予想される。経済局では竹材需要量を砂糖糖用二〇万本、出荷需用七十五万本、釣竿其の他五万本の計一〇〇万本を見込んでおり、地元消費の建築用、棚掛け用、物干用

其の他等を合せると莫大な竹材が必要で、以上の竹材量を生産する為には集約に経営されて単位面積当り生産数量の遙かに多い日本における竹林の生産数量から計算しても五〇〇町歩以上の竹林が必要となるが、現在全琉球の竹林面積はその一割にも足りない。世界の竹類の分布は熱帯地方が面積の大半を占めており、特にアジアの季節風地帯では竹の生育はよいことになつており琉球も気候的には竹林栽培の適地である。

お隣りの日本本土では一般の竹林栽培はもとより、河岸での竹林造成によつて頻発する洪水の被害を最少限度に喰ひ止める一方、竹材の増産にも寄与してゐる。台湾に於ても一般の竹材生産林や農地や宅地の周辺の防風林としての竹の栽培は広く行われてゐる。

琉球においても竹材の需要が増加してゐる今日、既成竹林の改善や増植、流出土の堆積箇所や水当りが強くて崩壊のおそれある川の沿岸や農耕地の間に点在する除草や宅地の周辺等で竹の栽培がなされて竹材の生産や風害や水害の減少が図られることが望ましい。

一、竹の特性

竹はすばらしく生長の早いもので、タケノコとなつて地上へ伸び出してから幹が太さや高さの生長を終つて以後太りも伸びもしなくなる期間は竹の種類や生育する場所の気候の相異等によつて多少の差はあるがマダケやモウソウチク等の大竹種は二五—一五〇日、ホテイチクやクロク等の細竹種は二〇—三三〇日、南方産大竹種のマダケは六〇—七〇日となつてゐる。一般的に生長の期間は南方産の竹、大竹種、細竹種の順に短くなるようである。又竹は老衰をして使へものにならなくなる期間や利用に適する期間も甚だ短期である。すつかり老衰して枯れかゝる年令は大竹種が一〇年、細竹種が五—六年で、又伐採利用に適する年令は大竹種が三—五年細竹種が二—三年でそれ以上の老竹は病害におかされたり、変質したりして利用価値が低くなる。繁殖は地下茎からタケノコを出して行い、若くて太くて多数の細

根をつけた、いきいきとした卵黄色の地下茎は太いタケノコを数多く発生するので竹苗に適する。

地下茎は年々伸び広がつていき、その各節には多数の細根を発生する、一方多数のタケノコをも出してその下方にも多数の竹の根を発生して土からまり合つておるので水害や土砂の崩壊を喰ひ止める力が大きく、水害防備林や土砂防止林等に造成されてゐる。竹が四、五年で伐採利用が出来、数十日で一定の姿と大きさを完成し、根を無数に拡げて養分を吸収するので、たいの土地には青竹、つきつきに地下茎を伸ばしてそれからつきつきにタケノコを発生生育する等の諸性質は竹材の生産や利用、竹林を造成して水害防備や土砂防止や防風に役立て、たいの土地には竹林造成をして土産生産的に使用し得る等大変都合の有用植物である。

然し竹も場所や栽培法の適否によつて林の姿や、竹の大きさと質や生産本数、毎年の新竹発生本数等に大きなひらきがあるので適地を選んで植え付けて竹の特性によくあつた栽培法によつて優良竹林に仕上げねばならない。

二、竹の適地

風当りの強い所、急傾斜地、表土の厚さが二〇種以下の浅地、日射の強い南—西斜地、乾燥のひどい砂地、水の停滞する所等は竹を折損したり土壌が乾燥し過ぎたり過湿であつたりして竹の生育がよくない。峯通りや中腹以上の風当りの強い山地、石やこいしのあるところしてゐる土地、海岸の砂地、背風の低い雑草の繁茂地や常時水が溜つてつちちくした所はさける。

一般に地形の関係で風当りも弱く表土も割に深い山のふもとと一帯、風当りの弱い森林内やその風下の一帯、河岸の流出土砂の堆積地帯、部落内の空地や宅地等に適地が多い。栽培面積がある程度まとまり立竹密度も適当であれば一部の林縁竹が防風林の効用をつとめるし、竹が日射の射入を緩和して林内環境がよくなり竹の生育もよくなるので意情のゆるす限りまとまつた面積の栽培をおすゝめしたい。

三、植え付け地の地ごしらえ

地ごしらえの程度は竹林経営に当つてどの程度経営をかけるかどの程度木材生産量を期待するかをよく吟味し地形や地力や樹木の有無等に応じて次に述べる農業地ごしらえ法、林業的地ごしらえ法又は両法の作業を適宜に組合せる等すればよい。農業的地ごしらえ法は全面積に互つて樹木類や草本類を刈払つ



て掘り起し、やせ地では堆肥を一反歩当り二〇〇—一〇〇〇貫埋め込む。

傾斜地では地表に草やワラを一面にしきつめて表土の流出や乾燥を防ぐ、森林地では周囲の樹を残して防風樹帯をつくるし樹のない所では前もつて防風樹帯を植え付けておく、開こんだ一、二年間豆科の作物を間作して地力を増し取入を計ることも出来る。

林業的地ごしらえは森林地で労力を節約して自然力をうまく利用する地ごしらえ法で樹を適宜伐り残して風当りや日射をやわらげる様にし、その間に竹を植え付けるようにする。地ごしらえに当つては肥料木や枝張りとう生育の正常な健全木で高さ八米以内のものを点々と又は同高線上に列状に一反歩当り二、三本伐り残して枝張りを適宜せん定し老衰木や病害木や枝張りの強い樹等は除伐りき下草や灌木類も刈払う。勿論周囲に防風樹帯を伐り残す。掘り起しは植穴を苗株より少し大き目にし以て毎年周囲を二—三戸宛掘り抜けてゆく。(大山 保表)

胡瓜の栽培のコツ

胡瓜は果菜類中最も栽培期間の短かいもので、三、四カ月で栽培が終る。が胡瓜は草勢があまり強くないので植え放しでは殆んど収穫は望めない。多収を計るには入念な栽培管理が必要であり、栽培期間が短いにもかかわらず、比較的多くの労力を要するものである。

一、栽培管理

果菜類の収量は「収穫果数×一果平均重量」で現わされるが胡瓜の場合収穫される胡瓜の大きさは、短期、品種消費者によつて一定の好みがあり必ずしも成熟期に収穫されるものではなく、好みによつて未熟のうちにも一定の大きさで収穫されるので収量は果数に左右されることになる。従つて胡瓜の多収には収穫果数を増さねばならぬ。しかば果数の増加はどうすれば良いかと言うことになるが、先づ考えられることは、節数の増加と着果率を高めることである。然し長期間にわたつて節数を増すのではなく、胡瓜は短期作物であるので多肥主義でどんどん蔓を伸ばし着果節位を増し、早く沢山の果実を取めるようにする。

節数は主枝にかぎらず側枝の節位も大切な問題であり整枝が必要となる。整枝の方法は品種や地方の習慣によつて異なつてゐるが、節成種で側枝が殆んど出ないものは整枝は問題にならず、支柱に誘引するのみである。節成り性のものでも側枝の発生が多いものとか或は育苗が良く肥料が充分であり定植後の生育が順調にゆけば子蔓が発生しこれからの収穫も大きなものである。しかしこの場合は一本の側枝に一、二果位は期待し難いので二三葉で摘芯する。七、八枚も出てから一、三枚で摘除したのでは無駄が多くなるので、摘芯は出来得るだけ早い方がよい。

側枝は収穫が終れば切り捨て、通風を良くし病虫害の発生を防ぐと共に薬剤散布等の作業を便利にする。

大型胡瓜では収穫の主体が側枝にあるので、主枝を三、四尺で摘芯し、多くの側枝を発生させるか、主枝を五、七尺目で摘芯し四、五本の側枝を出させるとよい。

胡瓜の蔓の伸びは芽が上に向つて居る時がよいので、支柱を立てると伸びも良く狭い株間でも充分に収穫出来る。

施肥、薬剤散布、収穫等の作業にも便利で、且つ果実の外観も良い。地上に這はすとべト病の発生が多く、果実は奇型果が多く片側が白色を呈するので商品価値を低下する。

支柱立ては、二睡の支柱を組み合せて屋根型に作る。

竹や細い木を用いるが、竹が取扱いに便利である。先ず材料を株元より三寸位外へ出して出来るだけ深く挿し込んで、立て支柱の先端を組み合せる。

蔓は巻ひけを出してからみついて伸びるが、胡瓜は蔓の伸びが早く、発育盛時には一夜で四五寸も伸びることがあり、巻ひけのみでは支柱からみ合うことが出来ないため蔓の結びつけが必要になる。結びつけは朝鮮カマスをとき、その糸で蔓を廻し一度ねちつて支柱に結びつけるとよい。側枝の発生するものでは横に蔓を張りこれに結びつかす。

前にも述べたように這い作りは種々の作業に不便を感じるが農家では殆んど這い作りが習慣になつて居るようである。這い